令和　４年度　学校評価総括表　　生駒市立鹿ノ台中学校

Ⅰ　学校教育目標

豊かな心と自ら学ぶ意欲をもち、主体的に活動する生徒の育成　～21世紀を生きぬく力の育成～　＜校訓＞創造・誠実・明朗
目指す学校像『一人ひとりが、生き生きと輝いている学校』（元気いっぱい　挨拶いっぱいの鹿ノ台中学校）

Ⅱ　前年度に残された課題

○生徒が輝く授業づくり
「主体的・対話的で深い学び」の推進、ICTを活用した授業づくり
○自治力と規範意識を培う
組織的・日常的な委員会活動の推進、生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進、生徒から信頼される生徒指導の構築
○保護者・地域から信頼される学校づくり
学校運営協議会の運営、保護者や地域との連携、学校評価の活用
○教職員の働き方改革の推進（いきいきと生徒と向き合うために）
ICTを活用した業務の効率化、定時退勤日の設定、部活動休業日の設定

Ⅲ　本年度の目標

①「主体的・対話的で深い学び」の推進（自分の居場所がある学び）
②ICTを活用した授業づくり
③生徒の自尊感情の醸成
④保護者・地域から信頼される学校づくり

Ⅳ　来年度に残された課題

・生徒が輝く授業づくり
「主体的・対話的で深い学び」ならびに「個別最適な学びと協働的な学び」の充実・ICTを活用した授業づくり　・自治力と規範意識を培う
組織的・日常的な委員会活動の推進・生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進・生徒から信頼される生徒指導の構築
・読書活動の推進
・保護者・地域から信頼される学校づくり
学校運営協議会の運営・保護者や地域との連携・学校評価の活用
・教職員の働き方改革の推進
ICTを活用した業務の効率化、定時退勤日の設定、部活動休業日の設定

評価項目	具体的達成目標と評価指標	外部アンケートの分析		自己評価			学校関係者評価
		児童生徒アンケート	保護者アンケート	評定	最終評価（成果と課題）	課題の改善策等	
①	・教員各自が「主体的・対話的で深い学び」についての理解を深め、授業公開を行い、授業力の更なる向上を図る。 ・学習活動の中で、ペア学習、班別活動、コミュニケーション能力を高める言語活動の場面を多く設定する。 ・自分の意見を発表したり、学級から学年へと意見を出し合う場を広げる。 ・朝読書とビブリオバトルの取組を一層推進する。	・「鹿ノ台中学校の授業はわかりやすく楽しく学習できる。」は、79.2% 「話し合い活動や意見を発表する授業、場面がある。」は、79.1% 「発表活動に積極的に取り組めた」は、80．1%と概ね肯定的な評価であった。 ・読書時間やビブリオバトルの取り組みを中心とした読書活動の推進は60．7%と昨年度を10ポイント近くダウンした。ブックトーク・家読の取り組みも継続しているが、結果に反映させるのが難しい現状である。	「生徒は、授業がわかりやすいと言っている」は、67.7%であった。（昨年度60.9%、2年前は72.0%）。感染症に配慮しながら1・2学期に分散型の授業参観を2回行い、実際の授業を参観していただく機会を持つことができた。	B	・道徳、総合、学活を含め、生徒の活動を大切にした授業が展開されていると思われるが、いっそうわかりやすく深い学びとなるように授業力を高めたい。 ・保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している。」では、肯定的な回答は、81．4%であった。新学習指導要領による2年目ということもあり、評価について内容の周知が進みつつあると思われる。 ・読書活動は、例年通り「読書の時間」「ビブリオバトル」に取り組んだが、生徒が自ら進んで読書する大きなきっかけづくりとはなりきっていない。	・昨年度に比べ、学校休業によるオンライン授業の実施はほぼなくなり、安定して授業数の確保ができた。今後は、「個別最適な学習」と「協働的な学習」の充実に向けて授業力を高めたい。 ・保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している。」で、肯定的な回答をいただいたが、今後、公立高校の調査書取り扱いに変更が見込まれることもあり、保護者・生徒に一層十分な説明が必要である。 ・読書活動の充実に向けて、「読書の時間」「ビブリオバトル」等の取組に更なる工夫を加え、学校図書館との連携も図りながら「本を読みたくなる仕掛けづくり」を行いたい。	・10月に学校参観をした際、図書館の充実を感じた。時期や季節に見合った特設コーナーの設置や室内装飾で明るさを演出し、気軽に利用しやすい雰囲気作りがされている。廊下の掲示板においても本の紹介がわかりやすくされていた。読書活動の推進に「学校図書館」の活用をお願いしたい。 ・「読むこと」に次の段階として「感想文」を書く機会を増やすことも読書の意欲向上につながる。 ・市で取り組んでいる「家読」の取り組みをぜひ、校内でも活性化してほしい。読書に対する保護者の意識向上も含め、家族で本についてコミュニケーションを持つことの大切さを機会あるごとに啓発できるとよい。
②	・教員各自がICTの活用についての理解と認識を深め、研究授業・授業公開を行い、授業力の更なる向上を図る。 ・全教員が、年3回以上、授業公開を行う。 ・ICT教育の推進のため、校内職員研修を行うとともに、各種研修会への参加を促す。	・授業におけるchromebookの使用内容（ロイロノート86.3%,写真を撮る48.9%,発表動画作成30.6%,ネット検索70.8%） ・ロイロノートを使った授業について（楽しい42.6%,わかりやすい44.3%,使うのが難しい9.7%,うまく使えないので楽しくない3.4%） ・eライブラリを使った学習について（楽しい30.1%,わかりやすい41.7%,使うのが難しい19.9%,うまく使えないので楽しくない8.3%）	【生徒向け調査の分析】 ・生徒回答のchromebook活用調査において、用途としては、ネット検索をはじめ、表現活動・意見交換・情報処理等にバランスよく活用されている。 ・生徒回答のchromebook活用調査において、ロイロノート・eライブラリともに操作の難しさを感じている生徒は少なくなっている。	B	・コロナ禍の中、感染症対応のオンライン配信や下校後の課題のやり取り等を実施した。ICTについて、職員研修の実施・市内教科部会等への参加により、教員のICT活用のスキルアップにつながった。 ・授業公開の実施について、今年度はオープン形式で年間2回の授業観察期間を設けた。市教科等研究会の開催も、感染症予防のため様々な制約がある中で、校内で担当教科以外の教科の観察も含め、教科横断的な視点から情報交換・意見交流を行うことができた。 ・学校休業中の「ICTを活用した授業づくり」の研修、学期期間中にITC支援員による「eライブラリ」研修を行い、教員全体でICTへの理解と認識を深めた。	・校内、校外のICTに関する研修への参加により、授業中の表現活動・意見交換や課題の提出等におけるタブレットの活用の機会はかなり増えたと思われる。教科ごとに有効な活用の仕方にも特徴があるので、他校とも情報交換しながら授業力向上につなげたい。 ・オープン形式での授業研究は、他の教科での工夫も参考となる点が多く、生徒の様子も知ることができるので、今後も継続したい。 ・ICT支援員へ質問を寄せる教員も多く、教科指導以外についても適切なアドバイスにより、校務がスムーズに進められた。ぜひ、実際の授業等にも同席いただき、生徒への支援もお願いしたい。	・働き方改革推進の中、研修時間の確保に工夫は要するが、様々な視点から学習活動に効果をもたらす研修の継続と職員のキルアップをお願いしたい。 ・学校参観の際、教科担当教員が一人で生徒のタブレット活用を看取るのは難しそうだった。生徒へのサポートをしてくれる人員がいれば、より一層きめ細かく充実した学習になる。
③	・生徒が周囲から評価され、認められる活動の場を増やす。 ・学校行事や委員会活動において、生徒の意見や考えを取り入れた内容を考案する。 ・年間3回の二者面談を行い、共感と信頼に基づく生徒指導の構築に努める。 ・生徒の自己有用感を高揚させる具体的な指標として、生徒アンケートの「自分には良いところがある」という設問に対する否定的な回答を10%以下にするとともに、「みんなでがんばることを通じて達成感があった」という設問に対する肯定的な回答を90パーセント以上にする。	・「自分には良いところがある。または、自信を持っていることがある。」は、全体で61.7%で、昨年度とほぼ変わらない。3年生については、64.0%で、1年前の2年生時の60.8%と比べ少し高くなっている。昨年度より制約が緩和されたコロナ禍の環境下で、できることを精一杯やり切り、達成感を持てたことが数字の変化に現れている。学年が上がるにつれて高くなってきており、取組の成果は出ていると考えられる。 ・「みんなでがんばることを通じて達成感があった」は93.2%と、目標の指標を上回ることができた。	「生徒は、楽しく、安心して学校生活を送っている」は、87.2%。「生徒は、学校行事に熱心に取り組んでいる」は、86.8%。「学校は生徒会活動や委員会活動が活発である」は70.1%と、コロナ禍の中で様々な配慮を要したものの、工夫しながら可能な限り行事等を実施したことを高く評価してもらっている。	B	・学習活動や委員会活動、学校行事、部活動等、あらゆる場面で各自の活躍できる場を設定するなど、自己有用感の高揚を意識した取組を進めている。その際、安心して自己表現ができる雰囲気作りにも配慮した。 ・体育大会での応援合戦や文化祭での有志発表は、大いに盛り上がった。応援合戦は学級ごとに取り組み、生徒の企画・立案を基本とした。有志発表は、多くの参加があり、どの発表も観覧者の心に深く響くものであった。。 ・「みんなでがんばることを通じて達成感があった。」93.2%と、他者とのかかわりを通した学校行事等を通じて、満足感を感じた生徒が多い。学年が上がるにつれて、他者とのかかわりを通して成長している様子がアンケート結果からもうかがえる。	・「人の気持ちを理解しようと努力している」は94.7%と、集団活動に不可欠な「他者理解」を心掛けながら行動している生徒がほとんどである。道徳科等でも、この視点からより質の高い指導を積み上げながら、生徒がお互いに安心して対話ができる関係の構築に努めたい。 ・「みんなで頑張ることを通じて達成感があった」に対する否定的な回答の生徒には、二者面談等で本人の気持ちに寄り添い、きちんと支援していく必要がある。	・学校へ訪問するたびに、生徒がきちんと挨拶をしてくれる。普段の学校生活における指導の成果だと感じる。 ・コロナ禍もあり、社会生活において、大人でも達成感を味わうことがなかなか難しいが、多くの生徒が学校生活の中で達成感を持つことができている。中学校生活でできるだけ多くの成功体験を積み上げ、一人ひとりの将来の自信へとつなげていただきたい。
④	・学習活動における地域人材の活用。 ・地域の保幼小との連携。 ・鹿ノ台納涼祭、オータムフェスタ等の地域行事への参加。 ・月一回の学校だより、随時のツイッター等による保護者・地域への情報発信。	1・2年生「認知症のケア」についての講演会の感想、あるいは3年生「校区内の園での保育実習」の感謝の手紙には、校内での学習だけでは学べない「人とのつながり」の大切さを実感し、自分の身近な生活や将来の生き方に役立てようとする姿勢が表れていた。	「学校は保護者や地域と連携して教育を進めようとしている」は、72.6%、「学校・学年は、保護者に教育方針や学校の様子を通信やTwitterなどでわかりやすく伝えている」は70.1%と、保護者・地域と連携した教育活動・広報活動を踏まえ、概ね肯定的な評価であった。	B	・地域ボランティアの方と整備委員の協力による緑化運動を進め、花壇の花植えを行った。 ・校区内の「認知症カフェ」の職員により、「認知症のケア」について生徒向けの講演会を開催した。 ・近隣の3つの幼稚園・保育園と連携し、3年生の「保育実習」を実施した。 ・2年ぶりの開催となった鹿ノ台納涼祭、オータムフェスタ、鹿ノ台コミュニティーバス試験運行開通式で吹奏楽部が演奏を披露することができた。 ・月ごとの「校長室だより」「学年だより」の発行、また、学校・学年行事の様子を伝えるTwitterにより、学校の教育方針や教員の思い、生徒の活躍の様子を発信するよう努めた。	・コロナ禍になり、中断していた活動が少しずつ再開できた今年度であった。校内の花植え、ダイヤモンドリリーの鉢植えの設置、門松の設置等、地域の方々の心遣いに支えられ、季節ごとの花々が生徒の心に安らぎを与えている。 ・「認知症」は、高齢者が多い校区に住む者として向き合うべき課題である。今回は1時間設定であったが、今後はしっかりと時間の確保をしながら教育的効果を高めたい。 ・「保育実習」は12月に感染症の状況を見極めながら、何とか実施することができた。家庭科の年間計画と実施時期の見直しをしながら、安全に継続していきたい。 ・学校からの情報発信には、自分たちの頑張りが披露されることについて、生徒が反応する声も聞こえてきている。自尊感情を高める手立てとしても、継続していきたい。	・保育実習について、校区園に通っている園児が大変喜んでいたと聞いている。保育体験は、園児の側にとっても貴重な機会である。今後も継続いただきたい。 ・感染症予防のため、ここ数年、地域防災訓練を縮小した形で開催しているが、防災には中学生の体力と判断力も必要となるので、中学生の訓練への参加、交流ができるとよい。 ・吹奏楽部の地域行事への参加が再開できたので、生徒がいろいろな立場で地域に参画できる機会を多く持てるようになるとよい。